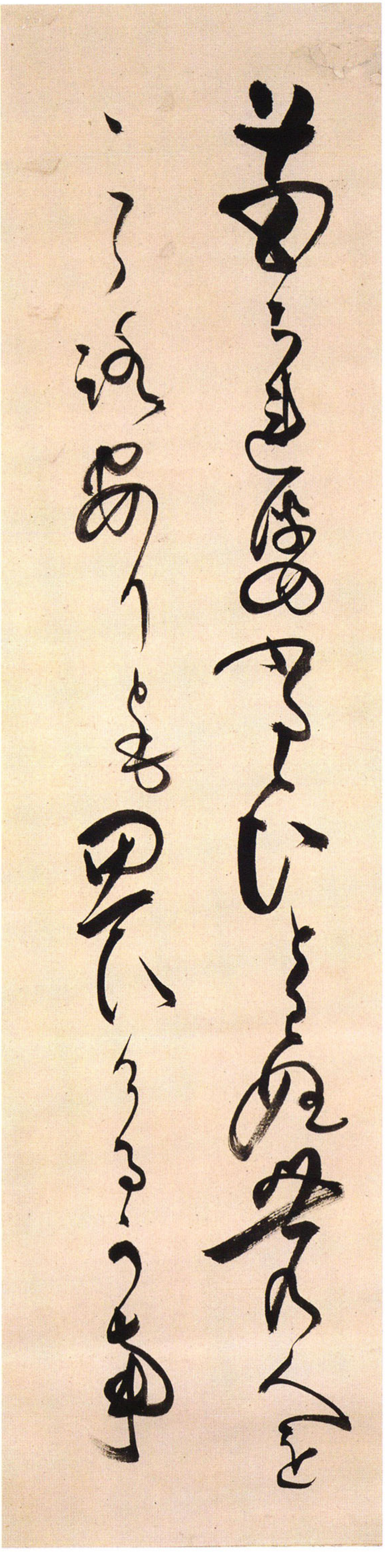

花ちれは　ふたゝひとわぬ　世の人を
こゝろありとも　思ひけるかな

64　述懐和歌「花散れば」　大久保利通

紙本墨書　一一七・三×三〇・五　一幅　〔三の丸尚蔵館〕
明治九年（一八七六）頃

大久保利通（一八三〇〜七八）は、鹿児島城下小姓組の家に生まれた。はじめ正助、一蔵を称し、諱は利済、のちに利通と改めた。甲東と号した。

文久三年（一八六三）に小納戸に抜擢され藩政に参与すると、小納戸頭取、側役と進んだ。次第に「国父」島津久光（作品番号51）の進める公武合体運動の限界を知ると、慶応二年（一八六六）に薩長盟約を結び、翌年の王政復古、さらには討幕の動きに指導的役割を果たした。

明治新政府が樹立されると、参与、参議を歴任し、明治四年（一八七一）六月には内務卿となり政府の中心として殖産興業を推進していった。また同時期に士族反乱などが続き、利通は同七年の佐賀の乱から同十年の西南戦争までの事件を処置した。しかし、翌十一年に石川県士族島田一郎らによって紀尾井坂で暗殺された。

この和歌は利通の和歌百三十四首と四十六編の詩を集めた『甲東詩歌集』（日本史籍協会編『大久保利通文書』九）にも収録されている。編年順に配列されている同詩歌集のなかで、この和歌は、明治九年に実施された明治天皇の東北・北海道巡幸の際に詠んだ詩歌に挟まれており、巡幸の先発として東北各地を廻った際に詠んだものと考えられる。ただし『甲東詩歌集』内では、冒頭部分が「花ちらは」となっており、若干の違いが見られる。

和歌のなかでは、花が散った後には再び訪れることが無い世間の人々を「こゝろあり」と詠んでいる。当時士族反乱が相次いだことによって、かつての盟友らを処罰せねばならない利通の心境を表したものとも考えられるだろう。

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

書の美、文字の巧
三の丸尚蔵館展覧会図録№74

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
　　　宮内庁書陵部
制作　株式会社　東京美術
翻訳　黒川廣子
発行　宮内庁
平成二十八年九月十七日発行
©2016, The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan
The Archives and Mausolea Department
Imperial Household Agency